51）ガレノスとヴェサリウスの解剖学の比較研究——筋系を例にとって

Comparative Study of the Anatomy between Galen and Vesalius—Especially on the Muscular System

順天堂大学医学部解剖学教室　坂井建雄

Tatsuo SAKAI

Andreas Vesalius (1514-1564) の解剖学は，本質的に Galen (129-210?) を踏襲したものである．両者の記述の各論的な内容については，これまで多くの先行研究がある．しかしその解剖学書の構成と性格についての総論的な研究は，坂井(1987) による Vesalius についての解析を除いて，ほとんどない．

人体の構造・機能に関する Galen の主要二著作のうち，『身体諸部分の有用性』全十七巻については May (1968) の英語訳があり，『解剖手技』全十五巻については，第九巻の途中までをギリシャ語原典から Singer (1956) が，残りをアラビア語訳から Duckworth が英語訳 (1962) している．Vesalius の『ファブリカ』(1543) は，第一・二巻を Richardson and Carman (1998-) が英語訳し，『エピトメー』(1543) は Lind (1949) が英語訳を，中原 (1994) が日本語訳をしている．

Galen と Vesalius の解剖学書の英語訳に，解釈上の疑義がないわけではないが，今回の研究ではその限界に留意しながら，Galen の解剖学書の構成と性格がどのようなものであるか，それが Vesalius の解剖学書の構成と性格にどのような影響を与えているかを，とくに筋系の取り扱いに注目して解析した．

Galen の『身体諸部分の有用性』の十七巻の各巻の内容は，手/手首と腕/足と脚/栄養の器官/栄養の器官，承前/精気の器官/精気の器官，承前/頸，頭，脳，感覚/脳，脳神経，頭蓋/眼/顔/頭と背/背と肩/生殖路/生殖路，胎児，股関節/神経，動脈，静脈/結語，となっている．第一巻は Galen の最初のローマ滞在の間 (162-166) に，残りの巻は第二のローマ滞在の初期 (169-175) に書かれている．

『身体諸部分の有用性』は，身体の各部の構造がいかに機能的・合目的的にできているか例を挙げて提示する著作で，そのもっとも分かりやすい実例として，手から始めている．各部の筋の働きについて具体的に説明する前に，そこに登場する筋をまとめて紹介する傾向がある．第一巻十七節(指を動かす筋)，第二巻二節 (手と前腕の筋) と十六節 (上腕の筋)，第三巻十節 (足と下腿の筋) と十六節 (大腿の筋)，第五巻十四節 (腹壁の筋)，第七巻十節 (喉頭の筋) と十九節 (舌骨の筋)，第十巻八節 (眼球の筋)，第十一巻三・四節 (顎を動かす筋)，第十一巻十節 (舌を動かす筋)，第十二巻八・九節 (頭と背を動かす筋) と十三節 (肩甲骨を動かす筋)，第十五巻八節(股関節を動かす筋)，である．

『解剖手技』は，『身体諸部分の有用性』と同時期か，それより後にできた著作である．筋をまとめて紹介する箇所もあるが，解剖されていく部位ごとに筋が次々と紹介されていく傾向が強い．

Vesalius の『ファブリカ』では，第二巻で筋をまとめて扱っている．その内容は 62 章からなり，筋の記述をする章の後に筋の解剖法を述べる章が続く傾向がある．筋を扱う順序はおおよそ，頭部の筋/上腕を動かす筋/腹壁の筋/胸壁の筋/背部深層の筋/指を動かす筋/手首を動かす筋/前腕を動かす筋/下腿を動かす筋/大腿を動かす筋/足首を動かす筋/足指を動かす筋，となっている．部位よりも作用を優先して筋をまとめるところ，筋に固有の名称を与えずに番号を用いて「××を動かす第×番の筋」といった呼び方をするところで，Galen を踏襲している．

筋の同定については，若干の異動があり，たとえば母指を動かす筋について，Galen が運動性に基づいて四＋一 (手内に二，前腕に三) を区別したところに，Vesalius は観察に基づいて九 (手内に五，前腕に四) を見いだした．両者の解剖所見の差異は従来，Galen が主にサルを，Vesalius が主にヒトを解剖したその動物種差により説明されることが多かったが，この例のように観察・記述の前提の違いによるものも多いと考えられる．